

# 吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉特定非営利活動法人 古 川 学 人

## 日本国憲法公布六十年

### 鈴木文治 没後六十年

#### 民本主義唱えて九十年・中央公論百二十年

館 長 田 中 昌 亮

●日本国憲法公布六十年。憲法学者・原秀成氏は、『日本国憲法制定の系譜』で吉野と日本国憲法の関係を明らかにした。河北新報・二〇〇五年一月三十一日から紹介しよう。

「大正デモクラシーの旗手、吉野が、新聞紙上に軍部批判の記事を掲載したのは一九二二年。陸海軍大臣の現役武官制が、軍部による内閣支配を可能にしたと厳しく批判した。

これが翻訳されて海外に伝えられ、後にポツダム宣言第六項の軍国主義排除規定となった経緯を紹介。さらにこれが米国の日本国憲法制定の方針となり、戦争放棄と軍備力の不保持をうたった現憲法の平和条項（九条）に結びついたという。」

秋には「憲法展」を開催したい。

●一九一二年に友愛会（全国的労働組合組織）を創設した鈴木文治の没後六十年である。

鈴木は金成出身で旧制古川中学校（現古川高等学校）の第一回卒業生である。



河北新報1947(昭22)年5月14日掲載 懸賞入選論文

一九一九年には大日本労働総同盟友愛会、一九二一年に日本労働総同盟と改称し発展をとげた。吉野とは終生厚い友情によって結ばれていた。諏訪公園には一九六五年に記念碑が建てられた。題字は元首相片山哲が揮毫。碑の吉野作造記念館への移転を考えたい。

●中央公論新社創業百二十年。吉野が『中央公論』誌上で民本主義を唱えて九十年。中央公論の出発は反省会雑誌である。反省会というのは、禁酒して、真剣な態度で人生に臨むことを誓った若い仏教徒の集まりであった。反省会雑誌から反省雑誌に、そして中央公論に名前が変わっていった。一九一三年吉野がヨーロッパ

から帰ってきた。その時、吉野の後輩、滝田樗陰が吉野に論文執筆を依頼した。そして、一九一六年吉野は「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」という長大な論文を発表し民本主義を説く。二〇〇九年より陪審員制度を採用することが決定している。吉野は一九一九年九月号の『中央公論』に「陪審員制度採用の議」を発表している。一部を引用する。

「常識の判断は如何なる場合に於ても法律家の形式的判断よりも有力である。已に法律其物が時勢の進展に伴って改正せらるべき者たる以上、之に道徳的權威を認めんとするのは正当ではない。そこで此と彼との間に調和を計るべき

何等かの仕組みが必要となるのである。所謂陪審制度要求の声は実に此根拠に出づるものに外ならない。」

「陪審制度」についての講演会、講座等を開催したい。

NPO法人

古川学人 理事長

佐々木 源一郎

NPO法人（特定非営利活動法人）古川学人は、吉野作造記念館の管理・運営を受託して満四年になりますが、この度、改めて古川市より指定管理者の指定を受けました。

指定管理者制度の意義は、NPO法人の持つ能力を活用し、住民に対するサービスの向上と地域福祉の一層の増進を図ることにある。

したがって、従前以上に民間組織の特性を発揮して、顕彰型事業・発信型事業・記念館活用型事業と三つに分類し、弾力的に取り組んでまいります。特に将来を担う人材育成と未来に継承する責務、吉野家及び吉野先生と接触をもった生の情報・資料などを収集・保存することが緊急の課題だと考えます。

また、最近「読売・吉野作造賞」を受賞された先生方と緊密に連携して全国に向けての情報発信の機会を準備いたします。

記念館の存在意義を高め、積極的に活用するため、NPO法人の会員をより拡大強化する必要があります。

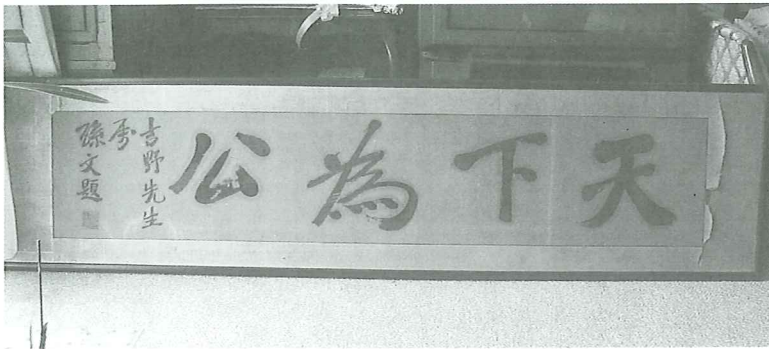
何卒、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# 新収蔵史料紹介

二〇〇六年三月二十九日、東京にお住まいの吉野氏より吉野作造関係史料一九点が寄贈されました。その中の一部を紹介します。

「天下為公  
吉野先生囑  
孫文題」

開館当時より当館常設展示室には孫文の横額を展示しております。これまで展示していたものは複製でしたが、この度現物は



をご寄贈いただきました。この横額には孫文（一八六六〜一九二五）が吉野作造に依頼されて書いたとの為書きがあります。いつどこでどのような経緯で書いてもらったものかははっきりしておりません。しかし、一九一五年六月五日の外務省記録に吉野が孫文の講演を聞いた後、十人くらいの日本人と共に会食したということが残っておりますので、恐らくこの時期に書かれたものではないかと思われます。

## 吉野作造表札

吉野作造直筆と思われる木製の表札を二点いただきました。



それにはそれぞれ「吉野作造」と「本郷区神明町三二七番地」と書かれています。この住所は一九二〇年（大正九）秋頃、吉野が家を新築し千駄木より移り住んだ場所です。

## その他

その他、中国で買ったと思われる帽子や吉野博士記念会案内・同会趣意書の入った小松清・光子宛石川清書簡一通、吉野作造肖像写真（中国帽・中国服着用）などもいただきました。

末筆になりましたが、ここに感謝の意を記します。

## 東北歴史博物館 協議会

二〇〇六年三月十七日、東北歴史博物館にて宮城県博物館等連絡協議会、平成十七年度第二回研修会が開催されました。

今回は、「博物館、地域社会との連携の模索―NPO・ボランティア・学校―」というテーマで研修が行われ、当館館長田中昌亮がパネラーとして出席し、「NPOと吉野作造記念館」という題で事例報告をしました。NPOが管理・運営をしている珍しいケースとして当館の活動を紹介しました。



# 吉野作造と宮城県

永澤 汪 恭

今から九〇年前の大正五（一九一六）年、吉野作造は、雑誌『中央公論』一月号に、「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」という論文を発表しました。

吉野は、この論文で民本主義を唱え、天皇主権の日本でも、民衆のための政治、民衆の政治参加が可能であると説いたことから、世間の注目を集めました。宮城県が生んだ俊英な思想家吉野の唱導する民本主義論は、大正デモクラシー運動の指導理論となりました。

当時吉野は、東京帝国大学法科大学教授でしたが、学生に政治史を教えることだけではなく、さらに民衆の政治教育にも情熱を燃やし、その後も膨大な数の政論を『中央公論』をはじめ、多くの雑誌に発表し、大正言論界のオピニオンリーダーとして活躍していきます。また吉野は、執筆活動に加え、講演活動も盛んに行っており、大正四年から昭和三年の間に、宮城県にも何度も来ていました。

そのなかでも、赤松克麿の選挙（昭和三年）の時、吉野が郷里古川で応援演説をしていたこ

とは、その写真も残っており、古くから知られています。赤松は吉野の二女の夫でしたが、吉野は友人の内ヶ崎作三郎の選挙戦（大正十三年）の時も古川で応援演説をしています。

このように吉野が宮城県に帰ってくる機会は、多くの場合選挙の応援が関係しています。実は吉野が東京帝大の教授になって故郷に錦を飾った大正四年の三月も盟友小山東助の選挙戦の応援のためでした。

この時吉野は、初めて古川の人々を前に「帝国憲政の進歩と総選挙」の題で演説し、その後の懇親会に出席し、郷里の人々との久々の交流を楽しみ帰京しています。

その一ヶ月後の四月一日、吉野は、母校である第二高等学級基督教青年会忠愛之友俱樂部創立二十五周年記念講演会（於東北学院普通部講堂）の講師として招かれ、「日支交渉の学術的観察」の題で講演をしています。

その後の二日間は、二高で恩師や友人教師の授業を参観したり、生徒たちを相手に演説をしています。また吉野をキリスト教に導き、吉野の人生航路に指

針を与える恩師ミス・ブゼルを尚綱女学院に訪ね、ここでも生徒たちに演説をしています。

さらにその午後師範学校に出向き、宮城県教育委員会主催の講演会で「教育の所感」と題して講演をしました。この講演で吉野は「西洋何れの国にも通用し得る世界的の人間、広く世間を見る人間をつくること」こそ戦略における教育者の心掛けるべき要件だとうたったえました。

この講演に刺激されたのでしよう。宮城県教育委員会は、八月再度吉野を招いて、「近代外交に関する講演会」を五日間にわたって行ったところ、九十一名が参加しています。

この年は、吉野が欧米留学から帰国して二年目にあたり、留学の成果を『中央公論』や『基督教世界』などに発表し注目され始めており、宮城県のキリスト教関係者、教師、政治に関心を寄せる人々の、吉野の話しを聞きたいとの願いが、吉野の来県を実現させたのでしよう。

二年後の大正六年三月二十一日、吉野は再出馬した小山東助の応援演説を仙台で行いました。演説会場には二千名をこす聴衆が詰めかけ演説会は盛り上がりたようです。

吉野が、二千名をこす聴衆を前にした仙台での講演会がもう一つあります。それが大正八年

五月二十八日に県会議事堂で行われた「我等」講演会です。この講演会は雑誌『我等』の読書会が計画したもので当日の講師は、同人の長谷川如是閑、大山郁夫と吉野の三人で、長谷川に続き吉野は「近代思潮批判」の演題で講演をしました。

吉野は「……校長大槻文彦先生が比の壇上に立つて我々に対して一場の訓話を述べられた」と仙台一中時代を回想した後、自由と平等を尊ぶ民本主義の立場から、朝鮮・中国との関係のあるべき方策や社会主義・過激主義に対する見解にもふれて降壇しています。

前年言論の自由を守るために右翼団体と闘った勇氣ある郷土の政治学者の講演に満員の聴衆は、深く感銘し、熱烈な拍手をおくったことでしょう。

民本主義者吉野にとつて、この夜の講演会は、郷里の聴衆に最も熱く語りかけた最高の講演会だったのではないのでしょうか。

永澤 汪 恭  
『吉野作造通信』発行する  
会事務局長・吉野先生を記念  
する会会員・宮城県学院中学校  
高等学校非常勤講師



▲長谷川如是閑『如是閑文芸全集』第2巻より

# イベント紹介

## 2006年3月

学校法人宮城学院共同企画展

### 「戦時下女学校の 学徒勤労働員」

二〇〇五年九月十七日～十月二日

アジア・太平洋戦争中、県内の女子学生の学徒勤労働員の実態を伝える企画展「戦時下女学校の学徒勤労働員」を開催しました。

この企画展は、学校法人宮城学院が五年がかりで進めた調査結果の巡回展で、県北の高等学校の資料を中心に約百点を展示しました。期間中は多くの方が訪れ、動員先の様子を収めた写真や、つぎはぎだらけの作業



戦時下の学校制度と教育

▶当時の様子を伝える展示品

服など当時の厳しさを伝える展示物を熱心に見学していました。

また、九月二日には宮城学院女子大学教授大平聡氏による講演会が行われ、学徒勤労働員が教育に与えた影響などを分り易くお話ししていただきました。

講演終了後には学徒勤労働員体験者から当時の様子についてのお話もありました。



▶展示を見学している来館者

### 井上ひさし講演会

二〇〇五年十二月十七日

当館名誉館長による恒例の講座が開催されました。年末の忙しい時期にもかかわらず二七〇名の井上ファンがかけつけてくれました。

今回は、三月十三日に大崎市民会館で上演された。こまつ座公演「兄おとうと」に先駆けて開催されました、講演では、兄の作造を「学問の塔にこもらず、自分の発言が現実の社会に影響しなければ意味がないと考えた理想的な学者」、一方弟の信次は、「大臣を二度も務めている



講演会「戦時下女学校の学徒勤労働員」  
講師 宮城学院女子大学教授 大平聡

▶講演中の大平氏

絵に描いたような高級官僚」と評し、二人の立場や考え方の違いを紹介しました。

また、吉野兄弟が生きた時代と現在の社会情勢を踏まえながら、靖国神社参拝や改憲の動きなど時事問題にもふれ、吉野の精神や思想をわかりやすくユーモアを交えながらお話しいただきました。会場を訪れた方々は、大きくうなずいたり、時に笑いながら講話に聞き入っていました。



▶講演中の井上氏

# このままで

## 2005年9月

読売・吉野作造賞受賞者講演会

### 阿川尚之氏講演会

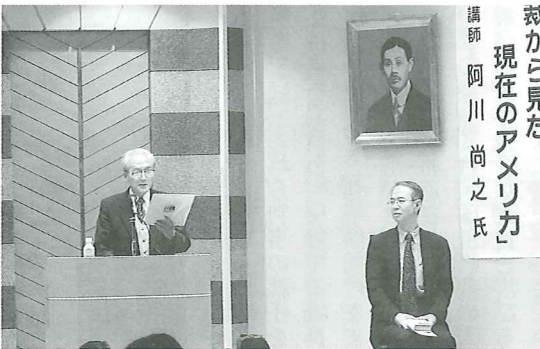
二〇〇六年一月二十八日

二〇〇五年度読売・吉野作造賞受賞者講演会を当館研修室にて開催しました。今年度は慶応義塾大学教授・東京大学特任教授の阿川尚之氏が受賞しました。受賞作品は『憲法で読むアメリカ史上・下』（PHP新書、二〇〇四年）でした。講演は「最高裁から見た現在のアメリカ」というテーマで話していただきました。講演会には、大崎市内はもとより、仙台市内や山形県、埼玉県などの遠方よりたく



▶講演中の阿川氏

さんの方々にお越し頂きました。講演に先立ち、阿川氏にサインをしていただいた受賞作を受付にて販売しました。書店では手に入らないとあって大変好評でした。追加注文もあり阿川氏に、後日郵送しサインを頂き注文された方にお応えいたしました。講演会要約については六頁をご覧ください。



▶館長による講師紹介の様子

赦がら見た  
現在のアメリカ  
講師 阿川尚之氏

昨年引き続き今年も、当館田中館長による吉野作造講座が九回にわたり開かれました。テーマである戦後六十年を考える企画として、受講者の方より、「戦争中のこと」、「玉音放送のこと」、「戦後のこと」という題名で作文を募集しました。講座当日は、提出していただいた作文を朗読、また受講者の皆さんから戦争中の様子をお話いただきました。



▶講座の様子

で逃げたこと、炎天下で聞いた玉音放送のことや、動員先の飛行機製作所での作業のことなど、それぞれの体験をお話し下さいました。決して忘れることのできない、また決して風化してはならない貴重なお話に、受講者の皆さんは熱心に聞き入っておりました。戦後六十年、薄れつつある戦争の記憶を残し、改めて戦争について考えさせられる講座となりました。



▶作文を発表する受講者

### 吉野作造講座

二〇〇六年三月十一日

二〇〇五年 読売・吉野作造賞受賞講演会

## 「最高裁から見た 現在のアメリカ」

阿川尚之氏

吉野作造博士は民本主義を唱えた。私はアメリカ憲法史を専門としているが、多数の意思に基いて統治を行なう民本主義あるいは民主主義と、憲法の規定に基いて統治を行なう立憲主義のあいだには、ある種の緊張関係がある。

政治の基本は多数の意思であり、そこにしか正統性を求め得ない。しかし同時に多数の意思が常に正しいとは限らない。このことは吉野博士もよく認識しておられたようで、民本主義すなわち民衆の意思の盲目的尊重ではない、民本主義をになうのは一種の精神的貴族主義であるべきだという主張をされた。

アメリカの憲法史でも、民本主義の弊害、すなわちいわゆる「多数の横暴」の弊害をどのように避けるかを、人々は繰り返し考えた。最高裁の九人の判事が憲法に基いて法律の合憲性を審査し、場合によっては無効とする、いわゆる違憲立法審査の制度は、その一つの試みである。昨年二〇〇五年は、最高裁に

とつて節目となる年であった。

最高裁判事の任期は終身である。判事が死去するか自発的に引退しないかぎり、辞めさせることはできない。実際二〇〇五年までの十一年間、判事の顔ぶれには一つも変化がなかった。ところが二〇〇五年七月、中道派として枢要な役割を果たしてきたサンドラ・デイ・オコーナー判事が引退を表明、続けて九月、かねて癌を患っていたウィリアム・レンクイスト首席判事が死去した。この結果、ブッシュ現大統領は憲法の規定にしたがって、二人の判事を指名する権利を得る。新判事がだれになるか、全米の注目が集まった。

オコーナー判事の後任には、当初コロンビア特別区連邦控訴裁のジョン・ロバート判事が指名されたが、レンクイスト判事が死去したため、ロバート判事はレンクイスト判事の後任として首席判事に指名替えとなり、上院の承認を受けて十月に就任した。代つてホワイトハウスの法律顧問ハリエット・マイヤー

ズ氏が、オコーナー判事の後任に指名されたものの、保守派の反発を受けて自ら指名を辞退。三度目の正直で指名・承認を得て一月に就任したが、ニューヨーク州の連邦控訴裁判所のサミュエル・アリト判事である。連邦上院司法小委員会の公聴会では、これら判事の就任を支持する議員と、反対する議員が激しく対立、判事候補にさまざまな質問を浴びせ、逐一マスコミによって報道された。

このように合衆国最高裁の人事が国民の大きな注目を浴びるのは、日本人には理解しにくい現象である。日本では最高裁人事が主として年功序列、しかも法曹三者（裁判所、検察、弁護士）プラス学会、他官庁出身者間の持ち回りで決まる。就任平均年齢が六十三歳と比較的高齢であるにもかかわらず、定年が七十歳であるから、任期も短い。したがって国民の関心は薄い。総選挙ごとに行なわれる国民審査の制度で罷免された最高裁判事は、新憲法制定以来まだ一人もない。

しかし日米の最高裁の最も大きな相違点は、違憲立法審査権の行使の仕方である。アメリカでは一八〇三年に判例によって、最高裁が憲法に違反する法律を無効にする権限が確立した。この権限があるからこそ、アメリカ



阿川尚之氏プロフィール

1951年、東京都生まれ。慶応義塾大学法学部政治学科中退。米国ジョージタウン大学スクール・オブ・フォーリン・サーヴィスならびにロースクール卒業。米国法律事務所を経て1999年から慶応義塾大学総合政策学部教授。2002年から在米国日本大使館公使（広報文化担当）。2005年4月、慶応義塾大学復職。5月から東京大学特任教授。

力の最高裁はアメリカの政治・社会・宗教・教育・道徳その他あらゆる分野で大きな影響力を行使するのである。そしてその大きな権限ゆえに、アメリカ国民は最高裁人事に注意を払う。アメリカ占領当局は日本国憲法にも第八十一条を設けて、最高裁に法令審査の権限を与えた。しかし日本の最高裁は、少なくともごく最近まで、この権限の行使にきわめて慎重であった。最高裁に対する両国民の関心の差は、ここから生まれている。

冒頭述べたとおり、合衆国最高裁の違憲立法審査権は、多数の横暴に対する一つの抑止力として働いているが、それに対して批判がないわけではない。もっとも大きな批判は、それが反民主主義、反多数決主義であると

いうものである。選挙で選ばれたでもない九人の最高裁判事が、国民の代表が制定した法律を、あいまいな憲法解釈によって無効にしているのか。司法の役割に関して抑制的な考え方をとる学者や判事はそう主張し、逆に正義の実現、新しい価値の実現のためにはむしろ議会を先取りして積極的な憲法解釈をすべきだと、憲法の拡大解釈を支持する学者や判事は主張する。多数が常に正しいとは限らないけれども、エリート酌意的な判断に頼るわけにもいかない。司法審査をめぐるアメリカ憲法史上の論争は、吉野博士が取り組んだ民本主義のあるべき姿の模索と、どこかでつながついてい

こまつ座第七十九回公演

# 「兄おととと」感想文紹介

二〇〇六年三月十三日、井上ひさし氏による、吉野作造と弟信次の評伝劇「兄おととと」が公演されました。その感想文を紹介します。

待望の「兄おととと」を観劇して

武田 昭七

登米市石越町生まれの私が、「古川に吉野・三浦の秀才兄弟あり」と知ったのは不惑を遙かに過ぎていた。四人とも旧制の中学と高校そして東大エリートコース。作造は東大教授の政治家、信次は高級官僚から大臣、篤は淀橋税務署長から帝室林野長官を経て古川市長、義男は国鉄施設局長から参議院議員を経て宮城県知事と「位極人臣」の道をばくしん慕進された方々である。私は晩学ながら四人の業績や人柄に関心を抱いていた。然るに吉野博士の民本主義を簡潔に説明しろと求められてもお手上げである。三年前、東京都紀伊国屋ホールで初演されて大好評、その後大幅に増補されたとは言え、演劇では私の心にとろ響くのだろうかと三ヶ月待った。

当日の私は次の二点①多感な少年時代を絶頂期の吉野屋で過ごした作造。同期を預け先である没落の叔母宅で過ごした信次。二人の性格と人生哲学はこの時点で決まったのか。②兄弟の夫人が実の姉妹であり、たまの君代も十歳差という奇遇。折しもNHKの「功名が辻」で山内一豊の妻千代の「内助の功」が人気を呼んでいる。この辺りが如何に演じられるかを中心に觀賞した。就中、職種の異なる兄弟が寄ると触ると交わす醜い論争に、業を煮やした両夫人が一計を案じ、神奈川県箱根の湯本温泉に二泊旅行を仕組んだ場面は圧巻であった。口角沫を飛ばす蛮声と激論に、宿の旦那や隣人からのクレーム。しかし、このどたばた劇が見知らぬ別れ別れの兄弟を三十年ぶりに再会させる迫真の演技は、痛快な中にもほろりとするものがあり感動した。全体として格調が保たれ、台詞も聞き取り易く、照明効果もよく利き、さらにピアノ演奏も素晴らしく観客の雰囲気も良かった。



間、小耳に挟んだ声として①子供の騒音や観客の私語がなくて良かったね。②二幕五場の丸三時間なのにあつと言う間、たつたな。③たまのさん役が美人過ぎたんじゃない。④役者が六人だけとは最後の顔見世で判ったよ。⑤博士と信次の奥さん達も実の姉妹とは知らなかったわ。⑥信次さん役は典型的な官僚を好演したな。⑦あいであると思つて最前列の席さ行つたらくびた(頸筋)とまなぐ(眼)ばり疲れたや…などがあつた。

それにしても当日は五センチの降雪があり、気温も零下四度であつた。開場前三十分の屋外待ちには辛かつたが、係員の自動車誘導、入場時に「寒かつたでしょう、ごめんさいね」との一声、座席への適切な誘導など随所に心温まる気配りが感じられた。栗原市花山から駆けつけた知人も「いいものを見せて貰つた」と大変に喜んでくれた。出演者と舞台係の方々並びに開催関係者の皆様に満腔の謝意を表して擱筆する。

# 研究紀要第三号発刊

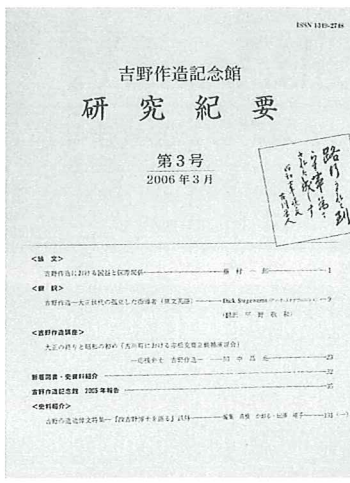
三月一日に『吉野作造記念館研究紀要』第三号が発刊されました。今回の論文は藤村一郎氏に依頼しました。藤村氏は当館の第一号、第二号の論文を踏まえ、吉野の国際政治論について新しい論点を提示されました。また、前号から、外国語による研究も翻訳紹介しており、第二弾として Dick Stegavernus (ディック・ステゲヴェルヌス) 氏の論文「吉野作造―大正世代の孤立した指導者」を掲載しました。翻訳は平野敬和氏にお願いしました。

また、当館館長による「大正の終わり」と昭和の初め 古川町における赤松克麿立候補演説会―応援弁士 吉野作造―では本年度開講された吉野作造講座の一部を紹介しています。

史料紹介では、吉野作造死後、娘婿の赤松克麿によって編集された『故吉野博士を語る』に掲載されていない追悼文を紹介しました。昨年七月二四日、吉野作造研究者である太田雅夫氏が「吉野作造研究とわたし」という講演の最後で、当館に対し『故吉野博士を語る』収録以外の追悼文集の刊行を要望されました。そこでこれまで当館で収集してきた吉野作造追悼文を中心に、死の直後に掲載された新聞記事なども紹介しています。

当館における本年度の事業報告なども紹介しています。盛りだくさんの第三号どうぞお買い求めください。(頒布価格八〇〇円)

※なお、創刊号、第二号も発売中です。(価格八〇〇円)



藤村 一郎  
「吉野作造における国益と国際関係」  
Dick Stegavernus  
翻訳 平野敬和  
「吉野作造 ―大正世代の孤立した指導者(原文英語)―」  
田中 昌亮  
「大正の終りと昭和の初め ―古川町における赤松克麿立候補演説会―」  
編集 高橋かおる 田澤晴子  
「吉野作造追悼文集 ―『故吉野博士を語る』以外―」

# 寄贈資料一覧

二〇〇五年十一月～二〇〇六年三月

多くの方のご厚意を得て  
貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

厚く御礼申し上げます。

（順不同  
敬称略）

## 〈資料名〉

## 〈寄贈者〉

『the座』第五一号改訂版 他一点	吉川 弘文館
『日本歴史』二〇〇五年十月号	こまつ 座
『おばあさんから孫たちへーみやぎの戦争ー』 退職女性教職員会の会	宮城白萩の会中央支部
『植民地支配・戦争・戦後の責任ー朝鮮・中国への視点の模索』 他一点	山田 昭次
『雲の柱』第十三号～十九号	賀川豊彦記念 松沢資料館
『私刑類纂（全）』	菅野 又雄
『文芸にあらわれた日本の近代』 他四点	佐々木 一郎
千葉亀雄色紙「悠然として青山に對す われ思ふ事無し」 他一点	菅原 一也
『みやぎ聞き書き村草子』第二集	境 数樹
『仙臺文化』第二号	渡邊 慎也
『箱根強羅ホテル』	井上 ひとし
『東京朝日新聞』一九二六年十一月二日付け（複写）	横山 寛勝
『Intelligence インテリジェンス』第六号	原 秀成
『高校生のためのみやぎの文学』	宮城県高等学校国語教育研究会会長 花井弘美
吉野作造関係資料 二九点	吉野 恆子

## 利用案内

### 開館時間

午前9時～午後5時まで（入館は4時30分まで）

### 入館料

一般 310円 高校生 210円

小中学生 100円

（団体20名以上、割引有）

### 休館日

月曜日（但し祝日・振替休日に当たる場合は翌日）

年末・年始（12月29日～1月3日）

## バックナンバー

「吉野作造記念館だより」

1号～13号

ご希望の方は記念館まで。

（※一部コピーで対応しております。）

ご了承下さい。

# 吉野作造記念館

〒989-6105 宮城県大崎市古川福沼1丁目2番3号

TEL 0229-23-7100

FAX 0229-23-4979

E-mail yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp